



## 池内 紀さんの

## 今月の本

### 『歌は季につれ』 三田 完著

あわただしく人が動き、金が動き、時が過ぎる。歌が生まれて消えていく。「歌は世につれ」が、ここでは「季につれ」。虚子門下の俳人の祖母、また母のもとで、俳句が twig 出す人間模様をホロにがく見ながら育った。マスコミの世界に入り、音楽番組のヒット企画にたずさわり、ころをみて退職、小説家に転じた。気がつく自分も心のヒダを匂に託している。

そんな人の昭和歌謡アンソロジーである。「冬の星空」「野崎小唄」「庭の千草」「リング追分」……。歌の背後に、めまぐるしく移り変わってきた世相があり、それをおもしろがりながら生きてきた自分がある。歌謡史に名をのこした作詞家、作曲家のこと。「じつは『津軽海峡・冬景色』によって、歌謡曲は従来の古賀メロディーとはまったく異なり、さりとてポップスでもない新しい姿に変態した」。なにげなく感じていたことをピタリとプロのセンスで言いあてられた。2,310円(幻戯書房)

### 『ヘタウマ文化論』 山藤章二著

週刊誌をおしりから開く癖のある人は、山藤章二を早く見たいからである。当代きってのイラストレーター、似顔絵、それも戯画化の手づきが入ると天下一品。生来の腕達者と思っていたが、若いころウマくなるために血のにじむような努力をした。首尾よくウマくなって仕事が軌道にのり出したころ、ヘンなのが現われた。ヘタなのにおモシロイ。ヘタだからいい。いまや絵に、芸に、サブカルチャー全体に、ヘタウマが風靡している。

まさに現場で「自分の長年の感性では判断のつかない『新しいカルチャー』」と立ち会ってきた人が、発生からひろがり、仕掛け人、そのルーツ、ヘタウマの性格、分析、特色。うつ向きかげんにポツポツと、記憶をたしかめながら、いきつもとどつして語っていく。その語り口が絶妙だ。前代未聞、えたいの知れぬ現象であれ、現代の日本の文化をそっくり代理しており、それを「ずっとひとり考えてきた」証しなのだ。冴えた感覚を文字で知る稀有な場がここにある。756円(岩波新書)

### 『サーカスは私の〈大学〉だった』 大島幹雄著

ロシア語を学んだのがボリショイ・サーカスとつながり、気がつくサーカスの世界に足を踏み入れて30年。何が自分を、これほどまでにしっかり結びつけたのか。

たいていの人には幼いころの淡い記憶があるだけだろう。日本のサーカスとはまるでちがった芸とショーの世界が、多くの私的エピソードをまじえて紹介される。「このサーカスを見て、いかに幸せになれたか」。そこのだ、サーカスは人がそこにいるだけで幸せになれる異空間、異次元の世界なのだ。だからこそ魔法のような曲芸、手品、からくりが用意されていて、芸とワザの鍛錬があり、お客を手玉にとる赤鼻クラウンがいる。心ならずもそこに入れこんだばかりに、人生を棒に振った男もいた。さらに政治や歴史に翻弄された人々のこと。文化史では永遠のまま子であるサーカスの世界へのあふれるような愛情が、沁みるようにつたわってくる。1,890円(こぶし書房)

### 『人生は、なんとかなるものである』 森田雄三著

マスコミとクチコミ、以前はこの二つだった。近年、ブログという新しいのが加わった。「『恩返し』って、どうすることですか?」「団塊の世代についてどう思いますか?」「演劇と愛情の関係を具体的に教えてください」……。クチコミがたちまちマスメディアにひろがり、また口づたいにもどっていく。

イッセー尾形の秀抜なひとり芝居、その影の人の演出家の「語録ブログ」。問いに答えるかたちだが、べつに役立つことなど意図しない。無用の用のひとりおしゃべり。「我々、団塊の世代は、どれだけたくさん『生活信条』や『生きる指針』を変更してきただろう。まるで、仮装の洋服を着替えるように、そのつど変身を繰り返してきたのです」。

ひとり芝居の舞台が、そのまま演出家の生きざまの表現だったことがわかる。役立つ効用とは遠いところで「なんとかなる」効用を果たしてくれる。1,470円(PHP研究所)

いけうち・おさむ  
ドイツ文学者、エッセイスト。ドイツ文学の翻訳やエッセーなど幅広い分野で執筆活動を展開。山と温泉、また町歩きが大好きで、旅の本も多い。「海山のあいだ」で講談社エッセイ賞、「ゲーテさん こんばんは」で桑原武夫学芸賞、「ファウスト」の新訳で毎日出版文化賞など著書、訳書、受賞多数。

『ミセス』書評委員のかたがた  
●池内 紀さん(ドイツ文学者、エッセイスト)  
○齋藤美奈子さん(文芸評論家)  
○中島京子さん(小説家)  
○野中 柊さん(小説家)  
○堀江敏幸さん(作家、フランス文学者)